

長引くコロナ禍で今年の贅会も、親睦会や食事会などのイベントが制限され、この『お知らせ』でも限られた活動報告しかできない状況が続いております。前々号・前号でそれぞれ4名の方から古美研の思い出や最近の状況・活躍のご様子などを寄稿していただいたところ、会員の皆さまから大変ご好評をいただきました。今年も引き続きご紹介させていただきます。ページを増やし6名の方々に寄稿していただきましたが、どなたの寄稿文も興味深くバラエティに富んだ内容です。皆様ぜひお楽しみください。

## ■ “あれから50年” 宮本(嶋)俊和さん〔1976年卒・庭園班〕



筑波大学を4年前に退職した後に、週1回渋谷にある鍼灸専門学校の臨床室で治療をしています。

水曜日の夕方は、つくば市の自宅に帰るために、渋谷の桜丘から表参道駅に向かって歩きます。青山通りの右側には、青学の正門が見えてきます。50年前の夕方には、古美研の例会が開かれていました。

大学在職中は、つくば市にある筑波キャンパスと東京の茗荷谷にある東京キャンパスを行ったり来たりしていました。筑波では、大学院のスポーツ医学専攻で、スポーツ医科学の研究とスポーツ選手のサポートをしていました。東京キャンパスでは、盲学校の鍼灸マッサージの教科を担当する教員養成を行っていました。臨床室では、主に膝、腰、肩の痛みを訴える高齢者の鍼治療をしていました。

現在は、視覚障害者のパラリンピック選手のサポートをしています。昨年の夏は、東京オリンピック・パラリンピック大会が行われていたので、選手村の総合診療所で選手に対して鍼・マッサージを行っていました。視覚障害者柔道連盟では、12月に国際大会を有観客で開催する予定です。そのため、「新型コロナウイルスの感染症対策のガイドライン」を作成しているところです。

最近の関心事は、三島検校（江戸前期の視覚障害の鍼医で幕府の寄合医師、2代目関東惣検校）の足跡を訪ねることです。検校の墓が自宅の近くにあることや近隣の寺のお堂の棟板や仏像から墨書が発見されています。文京区の護国寺にあった観音堂が、近くの般若寺の釈迦堂として移築されたことが伝えられています。三島安一、徳川綱吉、桂昌院、水戸光圀、隆光などの歴史上の人物が見近に迫っています。地元の伝承や徳川実紀や古地図を見ながら夢を膨らませています。

選手村診療所（中列左から2番目が宮本さん）→



## ■ “別府八湯温泉道” 齋藤(井元)久仁子さん〔1987年英米文学卒・庭園班〕

夫のリタイアを機に、長年住み慣れた東京から別府に移住したのが2年前。「別府八湯温泉道」なるものがあることを知り、せっかく温泉湧出量日本一の町に来たのだからと、温泉巡りを楽しむことにしました。

別府八湯とは、八つの温泉郷（浜脇温泉、別府温泉、観海寺温泉、堀田温泉、明礬温泉、鉄輪温泉、柴石温泉、亀川温泉）の総称です。そのうち温泉道に登録している温泉施設は約150、その中の88湯を巡ってスタンプを集め（御朱印帳ならぬスタンプ帳は「スパポート」と呼ばれます）温泉道名人を目指すのが「別府八湯温泉道」なのです。

2年の間に私が巡った温泉は64湯（2022年8月現在）。8湯ごとに段位がもらえるので八段相当なのですが、名人への道は険しそうです。というのも新型コロナの影響で旅館やホテルの立ち寄り湯がかなりの数中止になっているため、市営温泉や地域の共同温泉（通称ジモ泉）だけではなかなか数が稼げないのです（涙）。

また、市営温泉は新参者にとって比較的敷居が低いのですが、ジモ泉はなかなかのハードルです。ジモ泉は地域の公民館に併設されていることが多く、組合員が主な顧客です。他所者は規定の料金を払えば利用することができるのですが、何せ入口からして入りにくい。意を決して入ってみると地元マダムが裸の付き合い中で、ちろりん、と他所者に投げかける視線がなかなか冷たかったりします。「また来てねー」と温かい言葉を掛けられたこともありますが、その時は感涙にむせんだものでした。しかしながらこのジモ泉、鄙びた雰囲気が県内外の温泉愛好家に高い人気を誇ります。

みなさまも別府にお越しの際はバラエティ豊かな温泉をぜひお楽しみくださいませ。

おわり^^



スパポート（表紙の文字は「別府八湯 表泉家」 えっ、おもてせんけ?!）

